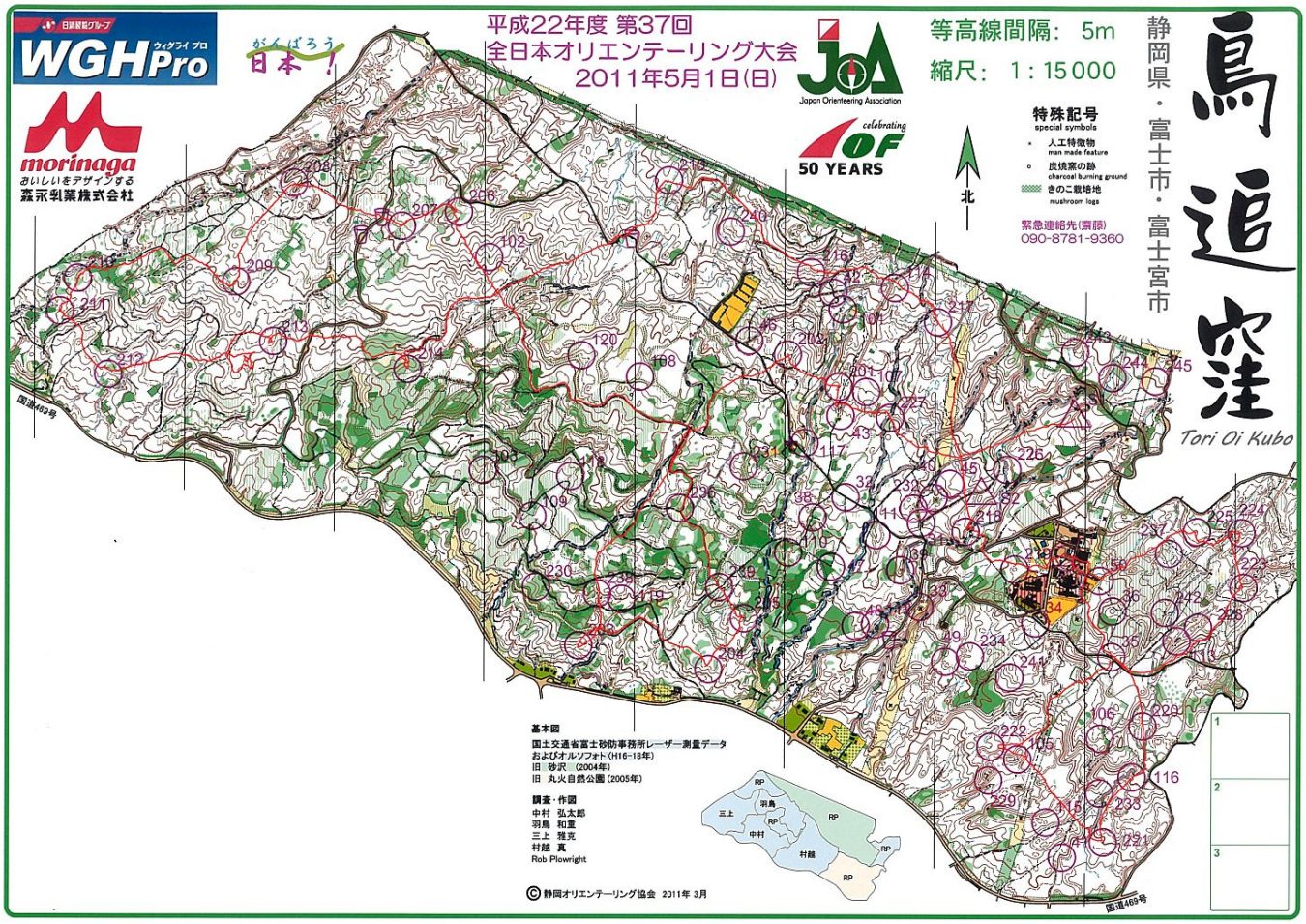
オリエンテーリング
道場第 65 回

# 長い全日本の果てに

松澤俊行




全日本大会を駆け抜けた松澤のルート。距離を測定すると実に 17km を超える。

距離 14.1 km、アップ 675m。11 年前に近隣のエリアで行われた国際大会(ワールドカップ)を凌ぐ長さのコースで競われた男子全日本選手権。フィニッシュ直後はもちろん、2 日後から始まったナショナルチーム合宿でも強化選手間たちは盛んにルート選択や、レースの感触について確かめ合っていた。その数々の証言を道場主が拾い集めた。

## 長さを味方に

**柳下大**

長いレースと言えば「ロゲインの帝王」、柳下大選手に分があるのでは。そう考えた競争相手や応援者、観戦者も多かったことでしょう。その柳下選手がフィニッシュ直後に残したコースの感想は…。

「特別きつくはなかったけれども、やはり長かったですね。」

さすがの表情、さすがのコメントでした。淡々と力を発揮し続けた、といったところでしょうか。長いといえどもオリエンテーリング、勝つにはスピードも重要です。フィニッシュ時点で見事暫定 1 位となり、総合力の高さを証明しました。

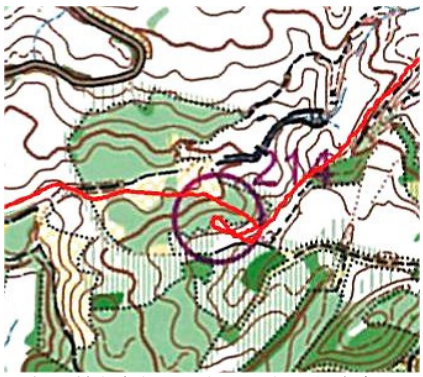
中間地点を走る 柳下大

**鹿島田浩二**

2006 年度から 2007 年度にかけての二連覇を含む三回の優勝経験を持つ鹿島田浩二選手。近年はトレイルランニングへも意欲的に取り組んでおり、長さへの対応力にも磨きがかかっている印象を周囲に与えています。40 代となって初めての選手権レースの手応えはいかに…。

「大きなミスはないが、小ミスを重ねて後退した感じ。給水(筆者註:M21E クラスでは、10.7 km地点、残り 3.4km ほどとなる会場通過時に、自前の水分や食料を置ける場所が設けられていた)の使い方に失敗し、水分を充分に補給できなかったのも手痛かった。」

ベストレースとはならなかったまでも、フィニッシュ後しばらくは暫定 1 位をキープ。40 代の観戦者たちからは口々に「渋く食い込んでくるなあ」との評価が。今年もやはり、「中年の星」でした。


ほとんど大きなミスなくこなした鹿島田の移動軌跡の中でミスらしい箇所はここだけ。

**篠原岳夫(コースプランナー)**

優勝者でも 106 分台、110 分以内は上位 3 人のみ。120 分以内ならばベストテン入りという厳しいコースを提供した設定者、篠原岳夫元全日本チャンピオンのコメントも気になるところです。

「当初はさらに長いコースを組んでいて、これでも短縮したぐらいでしたが…。ロングの全日本選手権ですから、威厳、貫禄を、という思いを込め過ぎたかもしれません。」

事前公開情報(プログラム上は、実施則にも沿った「優勝想定 90 分」との記述あり)との相違という点では問題がなくもない長さではありましたが、M21E 出場選手たちからは今回のコースの長さや、盛り込まれた課題には概ね肯定的な評価が聞かれました。「長さこそロングの醍醐味。長いからこそチャンスも多く訪れる。」こう考え、準備できる選手が勝つ。適切、妥当な選手権コースだった、と言えるでしょう。

## ルート選択の幅は

「広域のルート選択を含む重大なルート選択。」ロングディスタンス競技に要求される課題として、競技規則の運用ガイドラインに明記されています。(オリエンテーリング競技関連規程集参照。前述の内容は付表に記載。)「ルートチョイス・ロングレッグがロングの勝負所。」エリート選手は、そう強く意識してロングのレースに臨みます。全日本 M21E クラスのコースには 1.65km のレッグを含む直線距離で 1 km を超えるレッグが 4 本織り込まれていました。上位の各選手はこれらのレッグで、注意深いルートチョイスとシンプルなナヴィゲーションによって好タイムをマーク、対策の成果を発揮していました。一方、「ロングレッグのルート選択の幅は、案外狭かった」「もっと長いレッグを警戒していた」との声も聞かれました。

**山岸倫也**

世界選手権出場経験や、ナショナルチームのコーチ経験、全日本選手権を含むエリートクラスのコース設定経験も豊富な山岸倫也氏(今大会は M50A クラスに出場)の声です。「どの選手も、典型的な富士のロングレッグを走った経験が豊富。会場の位置や道の多さを考えてもロングレッグの数や長さは妥当だろう。」

設定者の篠原岳夫氏本人のコメントは…。「これ(最長のレッグ)以上に長くすると、どうしても道走り中心になってしまう。ルート選択を迫らず、体力を問う登りのロングレッグを入れたのは、『男子全日本選手権』だから、敢えて。」エリート選手への、特に上位候補の選手への期待の高さが自ずとにじみ出ます。

**松澤俊行**

私見では、211 番→217 番といった、とてつもなく長い、道や地形のラインをどうつなぐかを問うレッグが入っても面白かったのでは、と考えます。

こうした 3 km前後のレッグは、近年の世界選手権男子ロング決勝では毎年のように見られています。世界選手権決勝ともなれば、道走りも速いし、直進も高精度、地形の読み取りも難なくこなすような、つまりは「何でもできる選手たち」のみで競われます。

そうした、出場選手のレベルが高い大会でこそ、大胆な道走りが有力選択肢になりえるロングレッグも警戒されているはずです。

なにしろ、実力者にとっては、全てのルートが「ミスすることなく、速く行けるルート」です。その中に「走っていて面白いルート」と「つまらないルート」がある。つまらなそうな道ルートを却下したい、と思っても、それが正解かもしれないという可能性があるのであれば、真剣に他のルートと比較しなければなりません。時間に追われながら比較検討を迫られる、スリルとプレッシャーに満ちた読図もロングの醍醐味の一つ。こう割り切って、道走り含む選択肢の幅広さを追求したようなレッグも「あり」と思えば、エリート選手の闘いを観戦する楽しみも、もちろん走る楽しみも増えると思います。

3 位・松澤俊行 富士の新緑を走る

## ミスで負けないミスに負けない

今回の全日本選手権では、上位候補の選手に大きなミスが目立ちました。

**小泉成行**

二連覇を目指してのレースで、1 番から 4 分半のロスタイム(以下、ロスタイムは「ラップセンター」を参考に、解析上のミスタイムを記載します)を喫した小泉成行選手。

「ルート検討をしたところ、松澤選手と同じ場所でうろついていたようだ。自分はリロケートが遅れ、ロスタイムを大きくしてしまった。9 番でも 3 分。やってはいけないことをやってしまった、と反省している。」

昨年の全日本選手権者はアジア選手権者でもありました。小泉選手にとってはオリエンテーリングウエアの販売代理業や、各所でのナヴィゲーション講習講師業も重要な収入源となっています。アジアを背負う気持ちや、ある種のプロ意識により、従来のチャンピオンが感じていた以上のプレッシャーを受けていたのかもしれません。結果は 7 位となり、入賞に一歩及ばず。「アジアの王者」(アジア選手権は隔年開催のため、こちらは今も「現チャンピオン」の地位を保持している)の再チャレンジが始まります。

**寺垣内航**

最近のレースでは常に高い巡航スピードを見せる寺垣内航選手は、中盤の 5 分のミスで一旦入賞圏内から後退しています。

「10 番の周辺で現在地ロストしていた。その前のレッグでも少しミスをしている。リズムを崩してしまった。」

解析を見る限り、確かにミスを重ねていたようです。それでもスピードを保ち、6 位入賞を果たしている点はさすがといえるでしょう。

**松澤俊行**

上位で4～5分級のミスをしている選手がもう一人。そう、筆者です。13 番

で勘違いをし、コントロール付近と似て非なるエリアで数分うろつきました。大きな間違いをしているのは明らかだったため、道に戻って現在地を把握、勘違いを確認してアタックのし直し。その二度目のアタックでもコントロールをつかまえ切れませんでした。このケースもそうですが、熟練度に限らず大きなタイムロスをしている場合は、大体複数のミスを重ねているものです。

もう一度振り返ってみると、登りに転じた後のレッグでショートをした、という点は「要猛省」です。勝つためには攻めの走りが求められるエリート選手同士の闘いでは、ミスをするならショートよりもオーバーランの方が良い、といった気持ちで思い切って押して行くべきでしょう。ゴルフのパットで言われる「ネバーアップ、ネバーイン(届かなければ、入らない)」の精神が必要です。

反省しなければならない一方で、勘違いを認めてやり直したこと、13 番以降のレッグで立て直せ、3 位に食い込めたことは自分でも評価しています。

松澤のミスを捉えた GPS の記録。
ミスした時の動きも正確に捉えている。

大会直前に、松塾関係者に対して強調していた言葉をいくつか紹介しておきます。

「『不利』や『劣勢』は、『敗北』ではない。」

「楽な試合というものはない。『忍耐』『粘り』はどの試合でも必要。」

「実戦とは得てして思い通りに行かぬ物。泥臭く、粘り強く!」

5 位の紺野俊介

## 新チャンピオン誕生

**小林遼**

全日本選手権の、そして直前の大会での上位常連選手が苦しむ中、激戦を制したのは小林遼選手でした。そのレース内容とは。

「インカレで負傷し、直前に万全の準備をしたと言い難い部分もあったため、気負わずレースに臨んだ。ナショナルチームのトレーニングでコンパス直進等、基礎技術を磨いていることはプラスになっている。これまでであればリスク含みだったようなアタックでも、しっかりコントロールに辿り着くことができた。

大きなミスはなくこなしていったが、終盤、疲労から完全に頭が空白になった時間帯があった。『あれ、ここはどこだろう』という状態に陥った。その時に動き回らず、冷静に周囲を見回して解決したのが、今考えると勝ちにつながった。

年齢的に、鹿島田浩二さんよりも早いタイトル獲得とのことで、嬉しく感じている。今回は気負わず臨んで好結果を得たが、『体調が良い』と自覚している時に、気負いが出てしまって結果も出せないのは改善すべき課題。」

日本の頂点に立ち、この夏の世界選手権出場も決めた後も、気を緩めず、地に足の着いた考え方をしていることが伝わって来ます。経験が物を言いそうな長いコースでのロングを力で勝ち切った若きチャンピオンを、競争相手たちも認め、惜しみない拍手を送っていました。

私もそんな競争相手の一人です。若手と言われた頃に先輩たちを目標にしたように、ベテランと呼ばれるようになった今は若い選手を目標にしよう、そして自分を引き上げようという思いでいます。来年度は更に厳しく激しい勝負になること必至です。ベストの準備を期すると共に、読者の皆さんにも、「上位争いに今年以上のご注目を」とお願いしておきます。

(松澤俊行)

<松澤俊行プロフィール>

1972 年静岡県生まれ。過去にロング形式の全日本選手権で 2 回、全日本リレーで 2 回、全日本スプリントで 1 回優勝。来年度から全日本ミドル選手権も始まると聞き、全種目の日本選手権での勝利(グランドスラム?)に意欲を見せている。

「松塾」等、松澤俊行の活動に関するお問い合わせは mazzawa<at>aol.com まで。